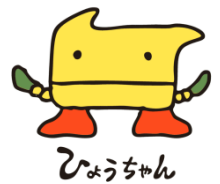


嬉望

第3号
平成27年6月30日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



大学マスコット

各自の課題と対峙

梅雨空の合間に、時折、初夏のさわやかな風を感じる時節になりました。

大学では前期も終盤に差し掛かり、院生たちは、それぞれの学びの中に、各自の課題意識をもって取り組んでいます。

一年生は、様々な授業の中で課されるレポートや発表に一生懸命取り組み、二年生は、積極的にフィールドワークに出かけ研鑽を積んでいます。

今月号も、雨にも負けず、ひたむきに学びを進めている院生たちの活動の一端を紹介いたします。



「現任教描写」演習

一年生院生による「現任教描写」の演習が始まりました。これは現任教の現状を客観的に分析して課題を見つけ、今後の自校が目指す学校の姿を探究するものです。

全国のような学校（教育委員会）における事例や課題、組織マネジメントなどを実例を通して学ぶことができる、この「現任教描写」は、学校経営コースの中核をなす演習の一つで、一年生にとっては前号で紹介した「事例分析」に続く大きな発表です。

そのため、時間をかけて現任教に関する資料を収集し、管理職へのインタビューなどを行い報告書とプレゼンの資料を準備してきました。発表時間は20分、一年生だけな

く二年生院生全員と学校経営コース全教員の前で発表となるため、かなり緊張感が高まります。

発表後は院生同士による質疑応答、教員からの指導・助言という流れになります。一つの事例について様々な視点から貴重な意見が出されるため、いつも新しい発見と学びがあるのがこの演習の特長となります。

発表を終えた一年生からは「調べる中で昨年まで現場にいた時には見えていなかった学校の特徴に気付いた、質疑応答や助言から改善案につながる貴重な示唆をたくさんいただいたことができ、本当に良かった」との感想がありました。



兵庫県立伊川谷高校の発表を行う岩本義裕主幹教諭

今月のフィールドワーク



千種地区園小中高一斉
オープンスクールデー
6月13日(土)

千種地区園小中高一斉オープンスクールデーに二年生を中心に一年生の一部院生が参加しました。

このオープンスクールデーは、保護者や地域の方に各校園の様子を気軽に自由に見てもらうため、保育園から高校までの一貫教育事業の一つに位置づけられているものです。千種小学校と中学校では授業を、千種高校では文化祭を公開していました。

千種小学校の授業を地域の方や保護者のみなさんと一緒に参観しました。どの教室でも子どもたちが熱心に学習に取り組み、先生と子どもたちとの信頼関係がしっかりと構築されている様子がかがうことができました。指名や発表のさせ方からは、子どもたちの多様な意見を引きださうという意図が見られ、整理された見やすい板書には子どもたちの理解を促す工夫がありました。

今回の授業公開など、千種小学校では教育活動を外部に

公開し、外部の力も取り入れ、常により良い教育活動を目指しています。

校長先生のリーダーシップの下、昨年度秋に実施した兵庫教育大学による第三者評価の結果も活用し、学習指導進部会と生活指導推進部会を中心に全職員が一体となっており取り組まれていました。そのことが保護者や地域の皆さんに理解されて充実した教育活動につながり、子どもたちの成長を支えているのだと理解することができました。

また、中学校、高校でも生徒達が熱心に充実した活動をしており、幼保・小・中・高の連携が機能している様子も見ることができました。地域の子どもたちを地域を力を最大限に活用して育てることの有用性、そして学校を外に開くことの確かな教育効果を感じることができたオープンスクールデーでした。



千種小学校 全校児童と保護者による、ふれあいドッジビー大会

(4面に続く)

(嬉望編集部特別企画 第二弾)

兵庫県立教育研修所 所長インタビュー

6月24日(水)

ベテラン教員の大量退職の時期を迎え、若手への世代交代が大きな課題となっている今、教育のバトンをつなぎ、教育の質を維持するためには、学校の組織運営とともに教員個々の人材育成は重要です。

そこで、人材育成の要である兵庫県立教育研修所に伺い、教員育成について、小山所長をはじめ、3名の方にインタビューしました。

・兵庫県立教育研修所

小山智久 所長

村中利章 企画調査課

主任指導主事兼課長

井守 貢 高校教育研修課

主任指導主事

※なお、井守さんは学校経営コースの修了生であり、先輩としての立場からも、お話ししました。

・兵庫教育大学

小川晶弘 (三田市立高平小学校)

辻 真吾 (兵庫県立西脇北高校)

三井 清 (山口市立大蔵小学校)

柳井崇史 (下関市立日新中学校)

古寺弘憲 (姫路市立朝日中学校)

1. 人材育成全般について

・期待される教員の力量

「教師の力量」に、教育的指導力と、組織を運営するマネジメント能力が考えられます。以前は教科指導力が高い先生が、いい校長になっていたのが、今は更に営業手腕などが求められます。だから、双方を包括するものとして「学び続ける」資質を持つていくことが必要です。

「教師」は、どの時点でも完成型はありません。ある特定の力を持つていれば、教員生活でずっとやっていけるというものはありません。自分の意思で積極的に学び、変化を続けることが、今一番必要だと思えます。

その資質があれば、立場が変わって、主幹教諭になっても、管理職になっても、それに対応する力を身に付けていけるのではないかと思います。

・教諭、主幹教諭、

管理職の課題



管理職は、リーダーシップの涵養。それも「俺について来い」ではなく、学校の関係者全体の意見を聞き、教職員が達成感を得るような取り組みを全体で推進していきける調整力のあるリーダーシップが必要だ。

主幹教諭は、フォロワーシップ。「言われたことは何でもやります」のフォローワーではなく、キチンと批判できる力が必要です。管理職はその学校を数年で異動します。言われたことをやるだけでなく、その学校のベテランとして遠慮せずに提言ができる力が大事です。

教諭は、メンバーシップ。全体が目指していることをきちんと理解した上で、自分の立場でできること、すべきことを理解して行動する力が求められます。

・研修と学校での教育活動

研修所では、希望により受講する一般研修講座の受講者に対して「学んだことを現場で実践したか」「他の教員に伝えたか」等の追跡調査をしています。

「実践した」の回答は半分ぐらい、「時期が来たら実践予定」まで入れると7割ぐらい、自分の実践については肯定的な結果が出ています。ところが、学びを広めたかについては「校内研修で伝えた」は1割に満たない。これが「一部の教員には伝えた」だと6割以上になります。全体に報告という形では少ないが、担当として一緒にやっている人と共有したことが読み取れます。

実際、現場は忙しく研修報告を全体の場ですることは難しい。だから、一緒にやっている担当同士で研修結果を共有できれば良いと思っています。

そもそも研修は、そのうち役に立つと思つて受けるのではなく、課題のある時に必要に迫られて受けなければならないと思います。先に「学び続ける」と言いましたが、学びのためだけに時間を割く余裕を現場ではなかなか持てません。しかし、しなければならぬ「仕事」の一環としてやる分には抵抗感はありません。



キーワードは「仕事が人に課題を与え、組織が人を育てる。」です。

仕事を同僚たちと一緒にすること。仕事の中に研修を置いていくことが、研修成果を組織の中に広げ、教育活動を充実させるだろうと思います。

2. 世代交代について

・世代交代と管理職の役割

ベテラン層が急激に減り、若手教員の比率が高くなる中で、学校全体としてのパフォーマンスを下げないためにはどうするのかということですが、結局は、若手は「仕事をやってみる」、管理職は「やらせてみる仕組みを作る」以外に無いような気がします。

研修でベテラン層を呼んだり、再任用教員を活用したりはできますが、結局のところ

フロントラインにいるのは、現役の教員で、担任や教科担当だったりです。

後方から助言はできても、様々な案件にまず一次的対応をしなければならぬのはフロントラインの若手です。だからこそ、初期対応で失敗して問題がこじれてからの助言より、そもそも最初から、そんな問題が起こらないよう上手くサポートできれば良いわけです。

またベテランが大勢いるうちに、若い人たちと一緒に仕事をし、問題に対応するなど、学校の中でのチームの組み方を工夫することも大切です。例えば、リーダーとサブを入れ替えてみるとか、色々な形でOJTをすすめていく方法が良いのではと思います。



小山智久 所長

3. 現職教員院生について

・兵教大派遣学生への期待



村中利章 課長

教職大学院設置の趣旨は、学校現場と大学院という専門の研究機関との実践の往還であり、それが生命線です。そう考えれば、「一言で言うところ、一日も早く管理職へ」ということになりません。

大量退職の時代、あと5年も経つと、どんどん管理職の枠が空き、誰もがなっていくかねばならない時代になります。その時に「いつでもなれます」という準備をしておいてほしいと思います。

つまり、来年度以降、主幹教諭や教諭として戻っても、常に「学校経営の視点」を持ちながら、メンバーシップやフォロワーシップを発揮し、管理職に向けたキャリアを積んでいってほしいですね。

・理論を实践として具現化するには



色々な人と関わり、その人たちが巻き込んでいける力です。教師仲間だけでなく、子どもたち、保護者、地域の方とも、それぞれの良いところを上手くつなぎ、組み上げて、クリエイティブな活動につなげていける力が大事です。

修了時に提出する学校改善プランも、頭でっかちな理論にならないよう、常に自身を振り返り、周囲の仲間や教員の助言を生かしながら「理論と実践の融合した」内容を考えることが大切です。

大きなビジョンを語るだけでなく、実現可能なところとの折り合いを付け、実際に現場で役に立つプランを提案し、実践してほしいです。

それこそが経営コースで学ぶ意味だと思っています。ただ単に考えて終わりではなく、還元していく姿勢を持ち、実際にアクションを起こしていくのです。

自分がその改善の最初に回る小さな歯車だと考えたときに、その次に回る歯車であるキーパーソンの動きを、校長の視点から具体的にイメージしておくことで、学校に戻って、自分が担当したプロジェクトが機動力を持ってグッと機能します。

もちろん、経験が無ければ、なかなか校長の仕事の意味や、校長が学校を見る視点を理解できないものです。インタビューシップ中のシャドウイングで、わずかでも校長の振る舞いや想いを学び、そこを起点として考えていける力をつけることは大変意味があります。

・学校経営コースで体験しておくべきこと

今日のような、他の組織の幹部とじかに接する機会は、現場に戻ってしまつと、まずありません。教育委員会幹部や学校リーダーの方と会う機会を通して、その方たちの想いの一端を知ることが出来る。また、校長にならないと校長の立場は分からないから、シャドウイングもさせてもらえらる。講演会、学会での学びもあります。

このような今しかない機会を大事にして、学びをまとめ、

後で振り返れるようにしておいたらいと思ひます。

また、現場に戻つて人と面と向かつて議論する機会もなかなか無いです。大学院では、校種や県市が様々な人たちと普通に机を並べていますが、これは素晴らしい機会です。この時間を大事にして、仲間と密に話をし、議論を交わしておく経験は非常に役に立つと思ひます。充実した時間や日々を期待しています。



井守貢 主任指導主事

紙面の都合上、インタビューの一部しか紹介できませんでしたが、現場に戻つた時に、私たちがどのような意識で取り組むべきか。また、その時に向けて、今、何をすべきか、皆さんのご示唆、ご助言を頂戴しました。

3名の皆様、お忙しいところ、本当に有難うございました。

姫路別所高校
オーブンスクール
6月17日(水)

平成26年度修了生である小田先生が生徒指導部長を務める兵庫県立姫路別所高等学校のオーブンスクールに2年生10名が参加してきました。

まず、体育館で高校一年生全体を対称とした講演会に参加しました。ネット犯罪の防止やネット依存について考える内容でしたが、高校生の実態に合った内容で、生徒たちは自分の問題として捉え、真剣に話を聞く姿が多く見られました。

それから、教頭先生に学校や教育課程の概要について教わりました。別所高校には、平成23年度に県立姫路特別支援学校の分教室が設置され、共同学習が盛んに行われています。また、「医療・看護」「保育」「福祉」「情報・商業」など、自分の進路に合わせて専門的な科目を選択できるシステムが構築されていました。姫路市の市川以東唯一の公立高等学校として、地域との連携による体験を充実させ、積極的に自己表現する力を育てようとしておられました。

授業参観では、3学年各5学級ある全校全学級の授業を参観しました。生徒の学習意欲や生活態度などが近年良く

なりつつあり、さらに良くしていきたいと考え、職員の人材育成にも取り組んでおられました。

何よりも、校内で動き回り、様々な催しの段取りをしている修了生の活躍を目の当たりにして、身の引き締まる思いでした。

第55回日本教育経営学会
6月20日(土)～21日(日)

東京大学を会場に、2日間をかけ、教育経営に係る様々な研究発表やシンポジウム、研究フォーラム等が行われました。本学からも浅野教授をはじめ教員4名、院生25名が参加しました。

午前中は自由研究発表会が行われました。学校内外における連携から、教職員個々の力量形成まで、全国から様々な研究が持ち寄られます。学生は各自の課題意識に合わせて、少しでも多くの情報を得ようと、各会場を移動しながら熱心に参加していました。

午後はシンポジウムやフォーラムが行われました。著書をおして名前を知る先生方が意見をやり取りする場に居られるだけでも貴重な体験でした。院生からは「教員評価における目標管理、OJTの工夫、

校長やミドルのリーダーシップ等、現在の教職大学院での学びとのつながりをあらゆるところで感じた」という感想もありました。全国で取り組まれている最先端の研究や実践に触れることをおして、自分たちが学んでいることや取り組もうとしていることを見つめ直すよい機会となりました。また、兵庫教育大学と関わる先生方の全国レベルでの活躍を目の当たりにして、自分たちが恵まれた環境に居ることも改めて実感しました。



実践フォーラムで発表される京都教育大学 笠沙教授(元兵教大教授)、司会は兵庫教育大学 浅野教授

平成27年度姫路市教頭研修
6月25日(水)

姫路市立総合教育センターにて、市内小中学校の教頭を対象とした研修会が行われました。その午前の部として、浅野教授の講義「教頭の職務と学校組織マネジメント」があり、2年生3名が参加しま

した。先日のニューリーダー研修で、浅野教授の講義を受けたばかりの教頭先生もおられるので、その時の内容をふまえ、一段階高いレベルのお話を伺いました。

学校の機能的側面(ビジョンからの教育活動)と共同的側面(人材育成・職場活性化等の組織づくり)について、一方ではなく、どちらも良くするために取り組んでいく着眼点を学びました。

伊丹市教育委員会
第一回評価委員会
6月29日(月)

伊丹市教育委員会第一回評価委員会を2年生6名が傍聴しました。

この会議は「地方教育行政の組織及び運営に関する法律第26条」に基づき、教育委員会が行う事務の管理及び執行の状況について実施した点検・評価の妥当性について外部評価委員による点検・評価を受けることで次年度以降の新規施策の立案や既存事業の見直しに反映することを目的としています。

なお、評価委員として本学の浅野教授と神戸松蔭女子学院大学の山内准教授の2名が各教育施策について意見を述

べました。最初に事務局から成果報告

について構成や評価方法についての説明があり、続いて各担当者から主な事業に対する成果と課題の説明がありました。その後、質疑応答があり、2名の評価委員から出された質問や意見に対して担当者や教育長から具体的な説明がなされました。

一連の説明や質疑応答の様子から、伊丹市教育委員会が年次計画に掲げた目標を達成するために様々な施策を打ち出し、その実現のために手を打っていること、そしてほとんどの施策が期待した成果を上げ、満足できる目標値を達成していることなどが分かりました。

今回の傍聴により、教育長をはじめ教育委員会の各担当者が真摯に伊丹市の教育課題に向き合い、外部の意見を取り入れながら教育行政を進めていることを理解することができました。

